

1

あこがれの洋間

暖炉まであるよ



大正7年につくられた洋館です。当時は、そもそも洋間というものが珍しい、稲毛に突然、西洋が現れ、中を覗くとそこに「あこがれ」の空間があった、という感じだったのではないかと思います。

また、この洋間

には、白色大理石をベースにした暖炉があります。ピクトリアンスタイルの絵描きタイルをみてください。植物をテーマにしたアールヌーボー風のデザインが印象的です。



2

飾りを施した塗り天井



上の写真は玄関ホールの上の天井です。ぐるりと装飾が施されています。そして、チャンドリアの

付け根には、ぶどうが描かれています。洋間の天井もつくられた当時はきつこのようだった、と思いますが、今は残念ながらフラットに修復されています。

国の登録有形文化財

旧神谷別荘内部のみどころを少し探る



3 1階の床はパーケット

パーケット??...

寄木細工をカッコよく言ってみました。木の色合いを考えて組み合わせ、幾何学的な美しい模様をつくっています。100年もの間、くるうことなく使われてきたことに驚きます。



4

アールな階段



階段は美しい曲線を描いて、ゆっくりと二階につながりま

す。踏板は樺の一枚板、一段分だけでなんと二十五段もあるのです。だから、たとえ膝が痛くても大丈夫。手すりは丸型、ワインカラーの光沢がシブイ。

5

二階は和風、主室は本格的な書院造り

二階は、外観のイメージとは違って本格的な書院造りになっています。鉄筋コンクリート造りの内側に木造下地の塗り壁をつけての和室です。主室は十二畳、大きな床の間のわきに二つの書院、なんと床柱はブドウの木なんです。



主室の周りには、広縁があってそのため、部屋が広く見えます。



6

竹縁の板張り打ち上げ格天井

和室の天井を見上げると...



主室の天井は3.2m、見上げると囲炉裏にいぶされた煤竹に縁どられた杉板の見事な格天井（ごうてんじよう）がみられます。一方、広縁は、窓側より室内へ上り勾配にはった棹縁天井になっています。

7

長押は吉野杉の面皮造り



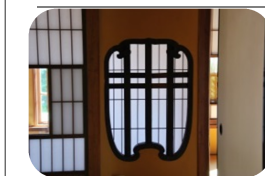
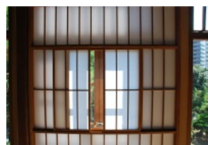
「なぜしはよしのすぎのめんかわづくり」と言われても、何のことやらさっぱりです。長押は、名前のとおり柱と柱の間を押さえて補強する部材のことです。そして杉板の角の皮をはいだまみ見せる伝統的な技法を面皮造りというのだそうです。

9

木瓜窓は一枚板



猫間障子とは珍しい写真では分かりづらいのですが、雪見障子に似た小窓を猫間障子といいます。上下ではなく左右に開きます。



木瓜はボケのことです。その花や葉の輪郭をかたどった文様が古くから親しまれてきました。木瓜窓は、明り取りの窓の形から名前がつけました。屋久杉の一枚板を削り貫いたと言っ説も？

10

付け書院の透かし彫りの欄間



主室には、二つの書院があります。向かって右側の「付け書院」の欄間に注目してください。ブドウの透かし彫り、蜂やトンボが飛んでいます。この別荘の主、伝兵衛さんが作った「蜂印香さん葡萄酒」に因んだデザインです。



11

付け書院出窓障子下飾りの時絵について

著名な漆芸家である藤澤保子先生にお聞きしました。「地塗り、線描、ぼかし時付けは剛腕かつ繊細」、さらに「黒漆塗り面に、研ぎ出し時絵高時絵、平時絵すべて網羅し時絵粉は、金銀、赤銅、その他合金粉が使われていて、その技は見事」とのことでした。また藤澤先生から、鏡面が板ではなく、棧の骨組みに和紙をはったものだとか教えていただきました。なるほど、よく見ると棧のかが見えます。



12

和風の中のモダン

洋館の中の2階は和風、そして和風の中にまた洋風・・・和室広縁の先に小さなくぼみ、アルコーブがあります。そして、納戸には、丸窓もついています。いずれも外観の意匠ですが、不思議と和風と解け合いながら大正時代の自由な雰囲気を伝えています。

